四季の山姥

長唄　全詞章

別題「新山姥」　資料の題名読み「しきのやまうば」

遠近の生活も知らぬ山住居、我も昔は流れの身、狭き庵に見渡せば、春は殊更八重霞、其の八重桐の勤めの身、柳桜をこき交ぜて、都ぞ春の錦着て、手練手管の客をまつ

夏は涼しの蚊帳の内、比翼の蓙に月の影、秋はさながら椽先に、三味線ひいてしんき節

髪の乱れを簪で、かき上げながら畳算、眠る禿に無理ばかり、ほんに辛いぢやないかいな

同じ思ひは鳴く虫の、松虫鈴虫轡虫、馬追虫のやるせなく何れの里に衣うつ、よくも合せたものかいな

〔二上り〕ふりさけ見れば袖が浦、沖に白帆や千鳥たつ、蜆とるなる様さへも、あれ遠浅に澪標、松棒杭のがれ来て、ませた烏が世の中を、阿呆阿呆と笑ふ声、立てたるしびにつく海苔を、とりどり廻る海士小舟、うき絵に見ゆる安房上総

〔三下り〕冬は谷間に冬籠る、まだ鶯のかた言も、梅の莟の華やかに、雪を頂く草屋の軒端、あだな松風ふき落して、ちりやちりやちりちりちりパツト散るは胡蝶に似たる景色かなアラ面白の山めぐり、どつこいやらぬと取手の若木、此方は老木の力業、中よりふつとねぢ切る大木、かけりかけりて谷間の、谷の庵に晏然と、其のまま其処に座をしめて、幾年月を送りけり